

放送人の会

No・41

2009・6.17

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

TEL&fax 03-3221-0019 E-mail info@hosojin.com

代表幹事 今野勉 編集担当 伊藤雅浩、鈴木典之、松尾羊一

“メディア・アンビシャス”

代表幹事 今野 勉

「名作の舞台裏」や「人気番組メモリー」の会場でいつも感じさせられることなのだが、番組というものは、私たち制作者が考えている以上に、視聴者に強く深く記憶されているようである。

たとえば、最近の「名作の舞台裏・相棒」の場合で言えば、会場からの質問で、水谷豊扮する杉下警部は、イギリス帰りということでもサスペンダーをしているという設定になっているのだが、ある場面で、上着を着ていたのだからなかったが、ほんとはサスペンダーをしていなかったのではないか、という指摘があった。論拠は、上着が風になくれたとき、サスペンダーが見えなかった、というところにある、という。

水谷豊は、その指摘に恐れ入って、たしかにあの場面ではサスペンダーをするのをサボっていたと告白して、会場は湧いた。

マニアックなファンのマニアックな指摘といえばそれまでだが、この質問者は、二百人の定員に三千人の応募があつて、たまたま当選した一人にすぎない。落選して会場に来られなかったファンが二千八百人もいるのである。

そして、こうして集まった番組のファンから、かなりの頻度で、現状のテレビへの不満が噴き出すのを、私はたびたび経験してきた。

テレビ番組を心から愛する人々が一方でテレビへ鋭い批判を持っているのである。

そうした事実を、直接肌で感じる機会があることは、実は制作者にとつてとても重要なことだと、私は、あらためて思っている。

直接の体験といえ、最近、幹事の石井彰さんに誘われて、阿佐ヶ谷の繁華街にあるロフトAで催されたテレビドキュメンタリー上映会へ行つた。「古木杜恵のドキュメンタリー酒場」というシリーズのイベントで、上映されたのが、先日、放送人グランプリの奨励賞を受賞した手塚孝典「ディレクターの「福太郎の家」であつた。

四、五十人も入れれば一杯になりそうな小さな空間だったが、ノンフィクション作家の吉岡忍さんや元BPOの田中早苗さんなどが来ていて、手塚さんから直接制作にかかわる話が聞けたり、終わったあと会場での酒飲み話があつたりで、こうした会が、地味ながら着実に、作り手を観客（視聴者）に結びつけていることにあらためて感動した。

制作者と視聴者が、ただ親密になればいい、ということではない。視聴者に支持される、ということが、制作現場での制作者の立場を強くすることの意味が、近頃ますます重要になってきている、ということなのである。

そうした状況を敏感に感じとつてのことなのか、北大の教授山口二郎さんが、最近、制作者を褒めて励ますことを理念とした市民運動「メディア・アンビシャス」を提唱している、ということを幹事の林健嗣さんから聞いた。

メディア・アンビシャス。いい言葉ではないか。ポーズ・ビー・アンビシャスの北海道から生まれつつある市民運動にふさわしい言葉である。

ありがたいことだし、放送人の会としても大いに協力・参加できたら、と思う。



09.4.25 「名作の舞台裏・相棒」観客席 情文ホール

放送人グランプリ2009(第8回)贈賞式



後列・左から 今野勉代表幹事、堀川とんこうG P選考事務局長、中町綾子選考委員
前列左から 手塚孝典氏、山縣由美子氏、塩田純氏、中村敏夫氏、吉田節子(直哉夫人)氏、大塚和彦氏

第八回放送人グランプリ
塩田 純 様 (NHK制作局文化・福祉番組部チーフプロデューサー)

ドキュメンタリ「神聖喜劇ふたたび」作家大西巨人の闘い、「BC級戦犯獄窓からの声」などETV特集、NHKスペシャル等の業績に対して

特別賞

中村敏夫 様 (プロデューサー、フジクリエイティブコーポレーション取締役副社長)

ドラマ「風のガーデン」、「ありふれた奇跡」を実現したプロデューサーとしての業績に対して

特別賞

山縣由美子 様 (キャスター、ディレクター、南日本放送)

ドキュメンタリ「やねだん」人口300人、ボナナスが出る集落」のめざましい業績に対して

奨励賞

大塚和彦 様 (ディレクター)

FM福岡「聞こえない声」有罪と無罪」のめざましい業績に対して

奨励賞

手塚孝典 様 (信越放送制作部ディレクター)

子育てスペシャル「福太郎!」寺町の大きな家族」の清新な業績に対して

特別功労賞

故・吉田直哉 様

放送界への大きな貢献に対して

選考過程報告 堀川とんこう



今年の会員からの推薦件数は約60件、昨年より少ないのですが、そこに推薦されている番組は委員の誰かが必ず見ている番組でした。それで非常に安心して選考に当たることが出来ました。

塩田さんはETV特集、NHKスペシャル、そしてハイビジョン特集、の3枠を行ったりきたり、3枠を股にかけてのご活躍です。統括プロデューサーとして以外に昨年塩田さんが関わったドキュメンタリー番組は6本以上ですが、あの戦争の意味、あの戦争がもたらしたものを検証するものです。

その一方で「神聖喜劇ふたたび」作家大西巨人の闘い、「加藤周一1968年を語る」「吉本隆明 語る沈黙から芸術まで」「小田実 遺す言葉」「アンジェイ・ワイダ 祖国ポーランドを振り続けた男」など：大変的な作業で、作家たちの知性が時代とやかに格闘したかを、あらためて彼らの文脈を読み直して確かめています。

これらの番組に塩田さんはすべて等距離で関わったのではなく、深いかかわりのある距離を保ってプロデューサーとしての役割を果たしたものがあつたようですが、昨年1年間塩田さんがなさつた仕事は見ればみるほど圧倒的という感じします。会員からの推薦が最も多かつたのが塩田さんで、多数の会員が熱烈

な推薦を寄せておられます。というわけ
でグランプリは塩田純さんにさしあげる
ことになりました。

特別賞の中村敏夫さんは昨年「風のガ
ーデン」「ありふれた奇跡」の2本の連続
ドラマを制作なさいました。この2本の
ドラマはテレビが最も華やかだったとき
の大作家がお書きになったものです。「テ
レビドラマの原点に立ち返ってやってみ
よう」とは誰もが一度は夢想するのだす
がなかなか実現しません。それを大胆に
やってのけた、そんなプロデューサーと
しての手腕、度胸を選考委員の皆さんは
は高く評価しました。

もう一人の特別賞、山縣由美子さんは
南日本放送のアナウンサーでキャスター
です。「やねだん」というドキュメンタリ
ーが昨年は大変話題になりました。番組
の内容は鹿屋市の柳谷集落、この地名を
この地方では「やねだん」とよびます。
「ボーンヌが出る集落」という副題がつ
いていますが、高齢化が進んだ過疎の集
落が自力で再生して行くまでを、12年に
わたって取材した記録です。見る人に勇
気と希望を与える素晴らしい作品だと、
昨年福岡で行われた日韓中テレビ制作者
フォーラムでも韓国、中国の方の支持を
取り付けてグランプリに輝きました。既
にグランプリは受賞なさっているのです
が、放送人の会主催の会でも贈りたいと
特別賞を贈ることになりました。

奨励賞の一人はFM福岡でラジオドラ
マを作られた大塚和彦さん。大塚さんは
年1回ラジオドラマを作っておられるフ
リーのディレクターで「聞こえない声く
有罪と無罪」というドラマをお作りにな
りました。私も聞きましたが、非常にア
イデアに富んだ面白いラジオドラマです。

ミステリー仕立てで、新しく始まる裁判
員制度をより深く理解してもらうためと
いう目的を持ったドラマですが、その目
的を超えて作品として面白く仕上がって
います。

もう一人、信越放送の手塚孝典さんに
奨励賞を差し上げることになりました。
手塚さんがお作りになった「福太郎！
〜寺町の大きな家族」は善光寺の門前町
で暮らす地域の人々と若いカップルの子
供である福太郎2歳、その交流を描いた
実に不思議なドキュメンタリーです。「福
太郎の家」というタイトルで芸術祭にも
出品なさって、私はそちらで拝見しまし
たが、さしたる事件もなく、ドラマテイ
ックなことが起こることもないのに、福
太郎という小さな男の子が門前町の人た
ちと交流する姿を実に淡々と見つめてい
ます。ところが番組をじっと見ていると、
作っている人が自分との同時代性を感じ
ているんだなあ、と思えてきます。立派
なドキュメンタリーです。今回は会員の
推薦もあり、選考委員のご賛同も得られ
て、晴れて奨励賞を差し上げることが出
てきました。

最後になりましたが、故・吉田直哉さ
んに特別功労賞を贈ることになりました。
吉田さんの業績については私があらた
めて申し上げる必要はありませんが、「日
本の素顔」から始まる仕事で日本のテレ
ビドキュメンタリーの基礎を確立された。
一方で大河ドラマ「太閤記」「源義経」「權
の木は残った」など放送史に残る大きな
お仕事を沢山なさって、長く語り継がれ
るに違いない業績を残されました。
この吉田直哉さんに特別功労賞を受け
取っていただくことに致しました。
本日はありがとうございます。

受賞者の言葉



塩田 純

ありがとうございます。
テレビ番組はディレクターのものだと
考えていますので、右代表のプロデュー
サーとして参りました。E TV特集を評
価して頂いたことが何より嬉しいです。
私は10年前E TV特集のデスクをして
おりました。ずっとディレクターをやっ
ていたいと思っていましたが「E特のP
ならいいか」と思って「プロデューサー
になります」と言いました。ところがE
特のPにはなれなくて、外国語講座、関
連団体出向という道を辿り、その間にE
特にはご存知の事件が起こり、私も非常
に悲しい思いをしました。それまで週4
回放送だったE特は週1回の放送になり
ました。4年前、永田君の法廷での証言
から権力の介入が注目を浴び、NHKは
改革することになって私はE特に戻って
きました。あの事件がなければ私が戻っ
てくることはなかったでしょう。

振り返ったときに私はE特を昔のよう
な番組に戻したいと強く思いました。か
つてあった自由な表現、社会的な弱者の
立場から見ると、何よりもディレクターの
志を大事にした番組を作る一こうしたE
特の現場にあった思いを復活させたいと
の願いで、この4年間番組を作ってきた

した。

今日こうして放送の先輩たちに評価し
ていただいたことは、私だけでなくディ
レクター皆も嬉しいし、NHK以外にも
喜ぶ人が沢山います。例えば「小田実」
はテレビマンユニオンが作った番組です
し、「アンジェ・ワイダ」はドキュメンタ
リ・ジャパンが作った番組です。それら
は私が出向しているときに出会った人た
ちに作っていただきました。

E TV特集は地味な番組で、再放送枠
が未だにありません。この4年間私はN
HKの上部に再放送枠を要求し続けてき
ましたが、実現していません。E TV特
集に対する局内と局外の評価のかなりの
温度差を感じます。こうして表彰された
ことを力にディレクターの志を表現でき
る場として「E TV特集」を続けて行き
たいと思います。これからもご支援をお
願ひします。



中村 敏夫

今日は本当に素敵な賞をありがとうございます。
致します。

山田太一さん、倉本聡さんという二大
巨匠の脚本家のおかげです。

3年ほど前、倉本さんが東京にお見え
になったとき「何をやるのか」と話をし
ました。たまたまそのときNHKのBS
でガーデンを作る人のドキュメンタリー
をやっていました。その人は冬は童話を
書いている素敵なおばあちゃまで。二
人で見終わって「おい、これありだな」

と突然「やりましょうよ」になりました。富良野で新しいドラマが出来れば面白い」と「風のガーデン」の企画が決まりました。

倉本さんの脚本はキャスティングが重要で、主人公は中井貴一くん、病気を抱えながら医学に邁進し、一方故里富良野にはガーデンがある。そんな形で中井さんに話をすると「是非やりたい」との返事です。フジテレビ開局50周年にあたり、皆さんの協力が得られ、私たちが見たいドラマが出来上がったと思います。

山田太一さんには3年ほど前、「星ひとつの夜」という渡辺謙さんの二時間ドラマをやった後「連続ドラマは無理でしょうか」と言ってみました。「12年前、連続ドラマはやめました」とおっしゃるのをその後会うたびに話を繰り返して、やっと「じゃあ書いてみましょうか」との言葉を貰いました。帰るときの私の胸の中は「やったー」の歓声でいっぱいでした。昨年1年を山田さんにはこのためにあけていただいて、ドラマができました。開局50周年に倉本さんに続いて山田さんという非常にラッキーな仕事をさせていただきました。

堀川とんこうさんは「突然やってくる賞だ」とおっしゃいましたが、本当に柵から牡丹餅で、まことにありがとうございます。



山縣 由美子

皆さんありがとうございます。鹿児島

の南日本放送から参りました山縣由美子です。今日こちらに到着して皆さんの顔を見たときには、久しぶりに会えた親戚の人のような、ほっとした嬉しさがありません。

日韓中テレビ制作者フォーラムを初め東京や各地での上映会にお力を頂きました。私たちは鹿児島県の小さな民間放送ですから作った番組は県内の方には見えていただけですが、県外の方に見ていただくことはほとんどありません。今日は日韓中フォーラムのその後のことを報告したくて参りました。

一つはあのフォーラムにいらっしやっていた韓国のプロデューサーの方が、「過疎、高齢化の問題は韓国でも全く同じです。これを何とか韓国で放送したい」と帰国後、全羅北道の自分の放送局の局員の皆さんに見せてくださって、ついに今年の1月全羅北道で放送が実現しました（拍手）。その放送を見た韓国の方々から大きな反響があり、「一度やねだんへ行きたい」という人たちのツアーが組まれ、しかも10回ツアーを組みたい、という話がいきなり来しました。さすがにそれはやねだんの皆さんも受け入れが難しいからと、とりあえず1回にしていたいただいて近く実現する運びなのです。

もう一つの報告ですが、やねだんの番組を韓国の企業の社長が見てくださいました。この方は韓国第4の都市大邱（テグ）でホテルを経営なさっていますが、「悩みは韓国も全く同じだが日本の片隅で自力でこんなに頑張っている人がいるなんて」と驚いて、自分で何度もやねだんへ行きました。何回か行くうちにやねだんの焼酎が大好きになり、「これは韓国の人の口に合う焼酎だ」と大量に買い、

ホテルの横に居酒屋「やねだん」を作ることになりました。店の名前も「やねだん」で、やねだんの食材を生かしてさりげなくやねだんを紹介してくださいさるそうです。

皆さんのおかげでいろんなご縁が広がっています。



今撮影している福留カメラマンを紹介させていただきます。やねだんの撮影が始まってからずっと二人三脚でやってきました。私よりはるかに多くやねだんへ通って撮影し、やねだんの子供たちに圧倒的な人気があります。そして彼は明日が誕生日です。二人揃って来られて良かったです。二人でみなさんに感謝を申し上げたくて参りました。

ありがとうございます。



大塚 和彦

FM福岡でフリーで番組を作っております大塚和彦です。

私はラジオドラマを作り始めて14、5年になりますが、2006年には、久留米の人が書いた原作をもとに、予算が少ないので出演者を一人にし、「ラジオ一人芝居」最後の初年兵」でギャラクシー

賞をいただきました。2007年には「月の調べと陽の響き」という琴と琴が対話するドラマで放送文化基金大賞の準グランプリをいただきました。2年連続で賞をいただいても気を良くし、2008年には3年連続で賞がとれるものを、

と考えているとき、裁判員制度がそろそろ始まることを知りました。取材は難しく、弁護士に聞いても的を射た返事が貰えない。裁判所では詳しく話が聞けて、裁判の傍聴にも何回か行きました。やるなら早い者勝ちだと思いましたが、何かひねりが利かない。ではラジオの限界に挑戦しようと思いを切り替えました。

ラジオの限界って何だろう？と考えました。ラジオは音だけで表現するメディアだ、そしてテレビと比べると瀕死の状態のメディアだ、そんなラジオをもう少し聴いてもらえないか、と思い、全く逆転の発想で「ラジオから音が聞こえなかったらどうなる？」と思いつきました。裁判員制度とからめて「音が聞こえない」ということを事件の中に挿入することにし、調べて行くとモスキート音に出会いました。モスキート音は16キロヘルツから17キロヘルツくらいの高い音で、20歳以下の人でないと聞き取れない音です。裁判員には20代が二人、あとは30代、40代、50代、60代と設定し、事件のキーになるモスキート音が殺人事件の現場にあったというミステリアスな設定にしました。三人の裁判官も40代、50代という設定で九人の裁判官、裁判員のうちモスキート音が聞こえたのは二人だけです。このため審議が変わって行く、そして最後にはどんでん返しがあるというドラマです。

本日はありがとうございます。



手塚 孝典

信越放送の手塚と申します。今日はこんな光栄な賞をいただきまことにありがとうございます。

この番組は民教協(財)民間放送教育協会)子育てスペシャル企画コンペに採用され、全国放送されました。当初、社内では「あんな企画がよく通ったね」と言われました。福太郎の両親は結婚も同居もせず子供を育てている、世間的にみれば情けない、ダメな親です。

・制作者同志ということ

代表幹事 今野 勉

ことしもまた、受賞者の皆さんは、魂のこもった言葉で、私たち放送人の会の会員に語りかけてくれた。

それらの言葉は、選ばれた制作者から選んだ制作者へと、年代にかかわりのない水平の視線で語られていた。

贈賞後の懇親会で、受賞者の方々と会員の人たちが、こもこも、あるいは談笑し、あるいは真剣に議論しているのを見ていると、私の胸のうちに、親愛とか畏敬とか勇気とか激励とか感謝とかあるいは希望などという言葉がつつぎと浮かんできた。

そして思った。この場にもっと会員がいてほしいと。極端な話、総会には出席しなくても、放送人グランプリの贈賞式とその後の懇親会にだけでも参加してほ

そんな人たちが主人公で、何にも起こらない日常を淡々と描きたいという主旨の企画を書いたのだ、「それが番組になるとよく思われたものだ」と言われました

取材を続けているといろんなことを感じました。社会全体はひどく視野が狭くなっている、異質なもののわかりにくいものを切り捨ててしまおう状況で、町のお年寄りや若者たちの価値観を理解できないのですが、それでも手を差し伸べて彼らと同じ町に生きて行くことを許容している人たちがいます。番組の反響も非常に大きく、賛否両論あったのですが、こんな番組が放送できて本当によかったと思います。今ローカル局はこんな経済情勢の中で番

しいものだ。

制作現場を離れて久しい会員の人も、この場にいるだけで、今、制作現場で奮闘している制作者の言葉を聞くことは、それだけで勇気づけられるのではないかと、思うし、受賞者の方々には逆にそうした先輩たちがただそこにいるだけで大いに勇気づけられるはずだからである。

つまりは、この場には、制作者同志だから通い合う暖かい空気が流れているし、それは、放送人の会ならではの特有の雰囲気であると思ったことだった。

この制作者同志のたたずまいは、制作者同志だけのものにしておくのはもったいない。制作者の活動と深くかかわりのある他の団体の人々にもこの場の雰囲気共有してもらったらどうだろうか、ということである。

たとえば、放送番組センターの皆さん、放送文化基金の皆さん、放送批評懇談会

組を作ることが非常に難しくなっています。今回の賞は私にも勿論励みになりましたが社内と一緒に仕事をしている者に大きな励みです。これを励みにこれからもいい仕事をして行きたいと思えます。



吉田 節子

亡くなりましてから放送人グランプリ特別功労賞をいただき、本当に嬉しゅうございます。主人もどんなにか喜んでい

さらには、新聞、雑誌のメディア担当の記者の皆さんも、である。

とはいえ、やはり、制作者同志だけの会という核心は動かさない方がいいとも言えるし、少し迷うところだが、せめて、もつと多くの会員の方々に参加してほしいものである。

そして、もう少し考えた。受賞者の方々の、あの率直な物言いは、もしかして、制作者同志だからこそ、心を開き心を許して生まれたものであるかもしれない、と。

おそらく、そうなのであろう。率直すぎて時に危険の香りさえする言葉を聞けるのは制作者同志だからこそなのであろう。

新しい年度のはじめに、嬉しくも悩ましい問題を抱えてしまった。

ることだろうと思えます。

50何年前、私が初めてラジオの仕事をしたとき、「普通の人間の声ではないラジオの放送をしよう」と吉田が申しまして、「マイクロホンのための詩集」という番組を作ったことを思い出します。それより前吉田はナレーションなしで、現実音と音楽だけ、その音楽も当時まだ無名の武満徹さんの音楽で番組を作ろうと言いつつ、そんなものが出来るのかと疑っておりましたら吉田は作ってしまいました。草野心平さんの「蛙」をやるのに、当時出たばかりのデンスケで録音したものを編集し、膨大な時間をかけて人間の声でない蛙の声を作りました。「この人は一体何を考えているのだろう」と思いましたが、いつも面白いものを考えています。

堀川さんに「どんな話をすればいいですか?」と伺いますと「仕事人間だったことを話してください」と言われました。確かに仕事をすると三ヶ月、半年、うちに居ないのが当然でした。あれだけ喜んで放送を楽しんだ人は居ないんじゃないでしょうか。自分がやりたいことを提案し、通ると台本を書いて撮って、また次の提案をする、の繰り返しでした。そのうち大型プロジェクトでいろんな枠をとりこわして「明治百年」を作りました。その前に大河ドラマをやりました。一人で1年間に52本を2年間、「太閤記」と「源義経」と続投して完投したのはおそ



新連載

遠くの仕事

秋山豊寛

らく放送史上例がないと思います。昨年9月亡くなる前「村木さんなど、親しい人がどんどん亡くなって心もとない。自分が死んだらどんなに皆に迷惑をかけるかわからないから密葬してくれ。骨は海でも山でも川でもいいから撒いてくれ」と申しました。私もそうしましよ」と家族だけの密葬にいたしました。そして発表した翌日、「太閤記」と「源義経」で弁慶をおやりになった緒形拳さんがお亡くなりになりました。

春から夏に向かっていた時期、つまり五月六月は、毎年ながら殆ど切れ目なく忙しい。農家にとっては繁忙期。春椎茸の作業が終わり、田植えが済み、夏野菜の定植が一段落するのが六月上旬。中旬からは田車を押ししての水田の除草の季節が始まります。

「ああ、こんなことがあるのか」とショックを受けました。

実は密葬は家族にとつては大変で、皆さんにうちへ来ていただいても大変ご迷惑をおかけしました。偲ぶ会やお通夜は要らないと申ししておりましたが、立派な偲ぶ会をやってください、沢山の方がご出席くださいました。お世話になりました。お礼もうしあげます。

それでももう十分にしあわせだと思っておりますが、今日思いがけずこうした賞をいただきました。ありがとうございます。



故・吉田直哉氏

昔、インド映画で、確か「大地の歌」という農民の暮らしを描いた秀作がありました。永く続いた日照りのあと、ようやく雨が降り出し、主人公が涙を流して喜ぶ様子に、あのオネエサンは、果たして、共感できるのか、という気がします。農の現場は、都会でテレビのオシゴトをしている女の子の感覚では、恐らく視えない現場であり、「遠くの仕事」になっているのでしよう。

普段は日曜日にしか見かけることのない知り合いの若者（と言っても年は四十代後半）が、平日の午前中から彼の家の周りの草刈りをしているのを見かけました。「代休でもとったの」と声をかけますと、「いやいや、五月から三勤四休」にな

ってネ。クビにならないだけマシですよ」とのこと。勤務先のトラクタの部品工場の仕事が激減したためだそうです。「オレなんか月給だからやってられるけど、パートさんは日給月給だから食えないんじゃない」と自分より厳しい状況の者が居ることが、不安感の下支えになっている様子。

「何か良い話ないですかネ」と聞かれても「良い話って、選挙で世の中変わる、ことぐらいじゃないか」と答えるしかありません。「それより、黒米をやってみない。一俵（六十キロ）六万円にはなるよ」と私が町内の仲間たちと共同出荷している「クロゴメ」の無農薬栽培の話を持ちかけてみました。

関東にある米屋さんがキロ当たり千円で引き取ってくれる他、自分たちで二百五十グラムずつ真空パックして、近くの日本式ファーマーズ・マーケットで直販すると、これが一袋五百円で売れます。単純計算で一キロ二千円。一俵なら十二万円。手間ヒマを惜しまなければ、普通のコメが一俵一万円前後にしかならないことに比べれば、中山間地での水田作物としては、かなり「良い話」です。



筆者紹介 秋山豊寛さんは66年TBS入社。ロンドン駐在、外信部、政治部を経て、90年12月、日本人初の宇宙飛行士としてソ連宇宙船ソユーズ、宇宙船ミールに搭乗、地球の映像や撮影を生中継、その際、思わず発した「これ、本番ですか」は有名。その後退職し、現在福島県の山間地で農業を営み、環境問題や宇宙などのエッセイを発表している。

いるクロゴメに比べ、色ツヤともに優れた黒紫米です。この黒紫色はアントシアニンによるものですが、身体にも良いとされています。炊くときは、ウルチ白米一合につき大きじ一杯のクロゴメを混ぜるだけで、実にきれいな紫色に染まります。モチゴメの粘りがウルチ米に移りますから、オコワのような食感になります。玄米食は「どうも」という人にも、抵抗感なく口にできる……という効能。

こんな「クロゴメ」についての能書きも、三勤四休の若者にとつては「ピン」とくる「良い話」ではなかったようです。「無農薬って、田圃で田車押すんでしょ。一寸キツイな」という返事。

都市下層民出身の私にとつて、カツウやウグイスの鳴き声を聴きながら泥にまみれての草取りは、かなり快適な肉体労働なのですが、農家出身の工場労働者の若者は「何を今さら」という気分のようにです。田圃で汗を流すことは、彼にとつても「遠くの仕事」なのかもしれませ

放送人グランプリ2009

表彰式・懇親会 2009. 5. 16



パーティーの写真は伊藤雅浩（広報担当）さんが撮ったスナップをコラージュ構成したもの

南船 北馬

ある「コラム」に寄せて

音響デザイナー 織田晃之祐

あれは今から10数年前の、朝のホテルのロビーだった。「フックスが屈いておられます」とフロントの人が手渡してくれたのは、松尾羊一さんの、ある大手新聞に連載されている放送批評の記事だった。

それは「音について考える」というもので、これを目にした東京の後輩が、機転を利かせて送信してきたものだった。その日の私は、音響効果のレクチュアの為に、大阪に来ていたのだったが、結局その日の話の内容は、この松尾さんの記事に終始したことを、今でも鮮明に思い出す。記事は映画監督鈴木清順氏の番組出演の話から、大正14年、日本最初のラジオドラマ「炭坑の中」のエピソード。サウンドエフェクトのパイオニア和田精氏、小生の師匠格、岩淵東洋男氏、劇作家菊田一夫氏等が、いかに「音」による作品表現に重きを置いていたかを説き、その流れの末席に、小生の名を連ねて下さった。「いやあ松尾さんって、いいですよ。番組作りっていうのは、プロデューサーやディレクターだけじゃないということを知っているものね。放送というのはラジオもテレビも『音』が大事だ。そして

我々裏方、黒子の存在を知っているものね！」その夜、レクチュアの後の酒の席で、一人の効果マンがまくしたてた本場の関西弁が、今も私の耳の底から響いてくる。

その松尾さんが、今回この会報の編集者だという。この思いがけぬ巡り合わせ。これこそが人生の醍醐味だと「松尾さん、ありがとうございます。番組にあやかり、ためして合点です。」資料を探すと、それは毎日新聞のコラム「電視社会考」平成5年11月5日の記事であった。

「放送人句会」野次馬記―その二― 新村もとを

松尾羊一（馬笑）氏が「鶴橋の俳句が中々良いので『放送人の会』に句会を立ち上げた」と西川章（阿舟）氏が宗匠役に平成十九年三月に発足した「放送人句会」の野次馬記、前回は「第三回」の大山勝美、橋本潔（きよし）の両氏が加わって下さったところで約束文字数に。

で、「第四回」には、そもそも此の「放送人句会」発足の元となったその鶴橋康夫氏が登場し、いきなり
舌絡み背中冷えゆく月ひとつ 康夫
と詠み、ようやく出来つつあった「放送人句会風」が、又乱れ行くかに見えた。

「第五回」からは、兼題のひとつを季題ではなく、当会らしく「放送」に関連ある題を馬笑氏より出されることになり身に沁むや夜半のテレビは砂嵐 きよし
芋煮会テレビ取材も食べながら

（伊藤雅浩） 視郎
テレビ消しまたテレビつけ秋の午後
（石橋） 冠

犯科帖事件解決西の市 もとを
業界人には、まあ得手な分野つてところ。

「第六回」は新年ということ
しばし手を裏表して初湯哉 馬笑
初芝居目線怪しき雪之丞 阿舟
松過ぎて淋しき通夜の赤き海老
（中村美生子） フミ

初夢を笑う女に嘘少し（堀川）とんこう
と、何やら、目出度いような出度くない
ような句が…。

「第七回」からは、山縣昭彦（ぼん太）氏が「妙な俳号ですが…」とバリ島名物の酒（アラック）を携えて参加。

濡れ場まだOK出でず臍なる ぼん太
一姫のやつと生まれて難を買う 康夫
「第八回」の放送関連題は『ピーカン』
ピーカンやパラソル林立台場ロケ
（大山） 勝美

ピーカンやレフ撥ねかえす雲の峰
きよし
「第九回」からは、荻野慶人、小池勝次郎の両氏が加わった。

若き母めがけ泳ぎし須磨はるか 慶人
蓮沼に河童の泳ぎありしかな 勝次郎
「第十回」を期に『吟行でも』という

話が出たが、青空の下よりネオン街の方に興味あるという意見が優った。

隣室の睦言絶えぬ夜長かな 勝美
運動会受付嬢を口説く奴 視郎
と、何とか十回までの「野次馬記」。

次は、十五回を迎える、蟬啼く頃に。

新人です。どうぞよろしく
アクターズ・カンパニー代表
豊田由紀子（まつり）

放送人句会事業？に第十一回から参加
致しております。別途所屬俳誌「童子」

に昨年出しました拙句から、いわゆる「バックステージ」ものを並べて、ご挨拶に代えさせていただきます。

句材のロケ場所は今秋九月公開、崔洋一監督「カムイ外伝」の、末尾句の奉納札は新宿花園神社のそれぞれ実景ですが、その他は私の仕事（俳優のマネージメント）全般からの寄せ集めフィクションです。

鋸南町石切場ロケ酷暑なり
きよなんちよう

ヒロインに付き人携帯扇風機

霍乱の欠員補充エキストラ

外寝等どうせ明朝四時集合

つかの間の深き昼寝を移動車中

親しきは泥汗まみれ助監督

朝涼や香盤といふ進行表

約定の日に銭入るや日雷

夏の果て連合赤軍模す映画

紅葉するや字幕に名なきお前俺

関係者席の至福や秋深み

女形芸の上手の冷まじき
じよやす

肝心の名を言ひ違い露の袖

真心をひとつまみ捨て秋乾く

チケットをギヤラとて二月札者かな

悪役に善き人多き春炬燵

春過ぎの奉納札に唐十郎

新作紹介

『刑事一代』（テレビ朝日）が21日22日に一挙放送されます。監督は『点と線』の石橋冠さん。刑事平塚八兵衛（渡辺謙）の人間像から透視した昭和戦後史は興味深いものがあります。（M）

最新放送作品、DVD作品など紹介
します。乞う一報、編集部まで。

第十三回放送人句会

◇平成二十一年四月十五日(水) ◇於：麦屋

◇出席：伊藤視郎、荻野慶人、鶴橋康夫、豊田まつり、

新村もとを、堀川とんこう、松尾馬笑、山県ぼん太、

西川阿舟 ◇不在投句：田澤風車

◇兼題：若葉、山葵、ガリ版

世を込めてガリ切りをれば青葉木菟 ぼん太(◎)視、康、

ま、も、馬、舟)

病みしより青葉若葉を厭う母 康夫(◎)慶、◎馬、

ま、も、と、舟)

君光る若葉鉢を貫きて 馬) 馬) 馬)

とんこう(◎)康、

春愁かガリ版プリント我を撃つ とんこう(◎)ま、

阿舟(◎)も、慶、

肩ふれし軒端の雨や若葉冷え 康夫(◎)と、

まつり(◎)ぼ、

春闘と真夜のガリ版截りはじむ ◎舟、も、馬)

ぼん太(視、馬)

ガリ切りの一字一字や春惜しむ とんこう(視、舟)

まつり(視、馬)

若葉挿して若葉の風を招じ入れ まつり(視、馬)

ぼん太(視、馬)

やさしさは山葵おろして呉れしこと ぼ) 馬)

康夫(視、ぼ)

房総の低き山並み若葉風 康夫(視、ぼ)

まつり(視)

花ほころびガリ版歌集刷りあがる 馬笑(視)

馬笑(視)

ガリ切りの同人集い花見哉 視郎(慶、康、も)

馬笑(慶)

ホルンの音若葉の谷を渡りゆく 視郎(慶、康、も)

馬笑(慶)

わさび田の香りが光る梓川 視郎(慶)

ぼん太(慶、と)

伝説の鬼棲む山も若葉せる まつり(慶、康、ぼ)

とんこう(康、ぼ)

花山葵湯通ししたる青さかな 視郎(康、ま、舟)

とんこう(康)

春風ガリ切る君の手を止めき 康夫(ま)

馬笑(ま)

山葵過剰な生命に溺れてる 馬笑(ま)

もとを(ま)

坪庭に仔猫たわむる草若葉 阿舟(も)

視郎(も、ぼ)

水奔る河津青荳山葵沢 阿舟(と、馬)

もとを(と)

歳三の墓に香煙草わかば 視郎(と)

もとを(舟)

行く春やガリ版切りの遅々として 阿舟(と、馬)

もとを(舟)

膳写版漸く了へて新茶汲む 慶人

風車

永き日をインクの匂ふ準備稿 馬笑(◎)慶、◎馬、

もとを(舟)

吊橋を渡りて狭き山葵畑 視郎(と)

もとを(舟)

そばする音のみ生きて若葉雨 馬笑(◎)慶、◎馬、

もとを(舟)

草若葉嬌声のそここに満ち 慶人

風車

ざる蕎麦に寄り添うごとく生山葵 馬笑(◎)慶、◎馬、

もとを(舟)

朝湯酒浮かぶ若葉を呑みほせり 視郎(と)

もとを(舟)

第十四回放送人句会

◇平成二十一年六月十日(水) ◇於：麦屋

◇出席：伊藤視郎、荻野慶人、鶴橋康夫、豊田まつり、

新村もとを、橋本きよし、松尾馬笑、西川阿舟

◇不在投句：中村フミ、堀川とんこう、山県ぼん太

◇兼題：短夜、日傘、配車

丘の上海に日傘を飛ばさうか フミ(◎)視、慶、馬)

馬笑(◎)慶、◎馬、

みぎひだり日傘が揺れる老いの坂 馬笑(◎)慶、◎馬、

康夫(◎)ま、も、馬)

雨あがる日傘がはりが待ち姿 馬笑(◎)慶、◎馬、

まつり(◎)も、

短夜は妻の口下手慈しむ 康夫(◎)ま、も、馬)

まつり(◎)も、

短夜の化物系の奴ばかり 康夫(◎)ま、も、馬)

フミ(◎)き、◎馬、

短夜や夢の置き場にはぐれつつ 康) 康)

康夫(視)

配車まで暫くあると氷菓食ふ もとを(視)

もとを(視)

潮風や外人墓地を白日傘 きよし(慶)

ぼん太(慶)

エーゲ海日本の日傘売る波止場 康夫(慶、き、舟)

康夫(慶、き、舟)

絵日傘の揺れてチンドン鉦太鼓 福ミ(慶、康、も)

福ミ(慶、康、も)

あッ雪と配車の訛り啄木忌 阿舟(康、ま、馬)

阿舟(康、も)

逝きし友かぞへ短夜明けにけり 慶人(康、ま、馬)

慶人(康、ま、馬)

短夜に物見の鳥啼きわめき 馬笑(ま)

馬笑(ま)

短夜の未明に逝くと決めにけむ 阿舟(ま)

阿舟(ま)

短夜に物見の鳥啼きわめき 阿舟(ま)

阿舟(ま)

突堤の先に佇む白日傘 阿舟(ま)

阿舟(ま)

上海の短夜更けて魔都しのぶ 阿舟(ま)

阿舟(ま)

羅の人駆け込みて配車乗る 阿舟(ま)

阿舟(ま)

配車待つ声華やぎて夜の梅雨 阿舟(ま)

阿舟(ま)

可愛さが驕慢になる日からかさ 阿舟(ま)

阿舟(ま)

昭和史の短夜に読む暗黒譜 阿舟(ま)

阿舟(ま)

短夜や夜汽車の停車一時間 阿舟(ま)

阿舟(ま)

配車して梶子の香の間に満つ 阿舟(ま)

阿舟(ま)

惜いやつ日傘くるくる振り向かぬ 阿舟(ま)

阿舟(ま)

オランダ坂のぼる日傘とパナマ帽 阿舟(ま)

阿舟(ま)

配車するパンチパーマの玉の汗 阿舟(ま)

阿舟(ま)

日傘して今日は美人とひとりごつ 阿舟(ま)

阿舟(ま)

注II(一)内は選者。視II視郎、慶II慶人、康II康夫、まIIまつり、もIIもとを、きIIきよし、とIIとんこう、馬II馬笑、ぼIIぼん太、舟II阿舟

次回 8月5日(水)

午後6時半

兼題

涼し、海月、滑舌

(夏の季語を入れて)



2008年度(平成20年度)会計報告

(2008年4月1日～2009年3月31日)

(2009年5月16日 総会承認)

1. 前年度繰越金		8,261,646 円
2. 2008年度収入		6,144,876 円
(1) 会費(含入会金)	1,545,000 円	
(2) 共催事業契約・助成金	4,400,000	
(3) イベント関連収入	140,000	
(4) 寄付・利息その他	59,876	
3. 2008年度支出		7,212,109 円
(1) 一般管理費	2,525,570 円	
(2) 事業費	4,686,539	
4. 2008年度収支 (1+2-3)		7,194,413 円
(普通預金・郵便振替証書・現金残高)		
5. 次年度繰越金		7,194,413 円

<2008年度特別会計>
 第8回日韓中テレビ制作者フォーラムin福岡
 (2008年9月24日～27日開催)

6. 特別会計収入	25,840,000 円
7. 特別会計支出	27,302,000 円
8. 特別会計収支差	△1,462,000 円

特別会計収支差については、一般会計繰越金(上記5)から充当し、2009-10年度において返済することとする)

2009年度(平成21年度)予算

(2009年5月16日 総会承認)

1. 収入		13,044,413 円
(1) 前年度繰越金	7,194,413 円	
(2) 会費(含入会金)	2,000,000	
(3) 共催事業・助成金	3,650,000	
(4) イベント関連収入	200,000	
2. 支出		8,620,000 円
(1) 一般管理費	3,370,000 円	
(2) 事業費	5,250,000	
3. 次年度繰越金		4,424,413 円

以上

第9回日韓中TVフォーラム決まる

韓国側主催の第9回日韓中テレビ制作者フォーラムの要項がかたまりましたのでお知らせします。

テーマ

『都市と人間(暮らし)』

3か国共通のテーマとして今回は作品素材を都市に生きる人々に焦点を当てることとしました。

日時 10月14日(木)～17日(土)

開催地 韓国 仁川市

例年通り各局に推薦作品を打診し集まった作品から「放送人の会」選考委員(メンバー 堀川とんこう 河野尚行 藤久ミネ 松尾羊一 石井彰 フォーラム実行委 大山勝美 長沼士朗 寒河江正)が選びます。

☆新刊紹介☆



『昭和断片』真珠湾からポプラまで』会員の三宅恭次さん(元RCC)から推薦の力作。著者の松永仁氏は元RCCの社員でJNN関連で知人も多く、往時の回想の数々は興味津々。

(溪水社 3500円)

名作の舞台裏 第23回

「相棒」(テレビ朝日・東映、2000年
〜2008年)

日時・09年4月25日(土)

午後1時半〜4時半

場所・横浜情報文化センター情文ホール
ゲスト・水谷豊(出演) 奥水泰弘(脚本)
司会・石橋冠(放送人の会)

作品上映のあとゲスト水谷豊が登場すると会場は「キヤー!」とアイドル歌手のコンサートと同じ熱狂である。



松本 企画の始まりは「土曜ワイド劇場」の「探偵事務所」です。水谷豊、段田安則でやっていた、次はオリジナルをと考えているときにコシ(奥水)に出会いました。

2時間のサスペンスは事件解明に追われて登場人物のキャラクターが薄い。きちんとしたキャラクターが作れば面白いものができると考えていました。NTVのさんまのドラマを見ると、実に面白い。キャラクターの展開もよく分かって、この脚本家にと決めましたが、スケジュールがつかまっていて、1年待つて貰えれば、という返事でした。「土曜ワイド劇場」には森口博子・寺脇康文のツアー・コンのシリーズがあり、新しいシリーズに水谷・寺脇でどうかと寺脇に話すと「水谷さんに慣れて役者になったのだからぜひ」という返事で、このコンビで話を作ってもらうことになりました。現探偵より警察の方が捜査権もあり、現

場に行くける2人だけの警察のセクションをコシが発明してくれました。2001年1月の放送でいい視聴率が出、テレビ朝日の上の方からは連続ドラマにならないかと言われ、2002年連ドラに踏み切りました。

奥水 1年待つて言われましたが、多分この話は立ち消えだろうと思っ

ていました。この業界で1年待つてなんてあまりないことで、それがもう9年続いています。

私はユタカ(水谷)さんのドラマを見て育った人間なので、ユタカさんのドラマは書きたかった。普通の刑事ではなく、名探偵の匂いのするものが警視庁でできないかと考えました。



水谷 一読してコシが「1年待つて」と言った意味が分かりました。これまでの警察ものと違って、役者に「こうやれ」と言っているホンです。

キャラクターを濃くしてありますが、自分としてはまわりが作ってくれと思っ

ています。

司会 クールで感情がないようにみえ、最後に感情が噴出してくるのにシビレるのだけど、あれは計算?



水谷 ストーリーに沿って右京をどう生

きるかを考えます。ここをどうしようとか細かくは考えず、自然に体が動くのにまかせます。

司会 「はい」という科白が多いですね。

水谷 (いろいろな表情で)「ハイ」「はい」「ハイ」。ホンはいろいろ変えると言っています。

司会 あの二人には敵が多い。特命係は孤立していますね。

奥水 もともとこんなに長く続くとは思っていなかった。短時間やるには対立軸

がはつきりしていた方がいい。しかし「嫌い」が毎回続くとおかしくなる。同じ座組みで続けるのは困難です。

司会 ロンドン帰りというのもユニークな設定ですね。

松本 アメリカ映画でなく、イギリス映画の重厚な品格を出したいと思った。スコットランドヤードにもロンドンにも、どこに居ても似合う男にしたい。

奥水 ぼくらの世代はユタカさんの「傷だらけの天使」「熱中時代」で育って、「俺たちの旅路」のガードマンが凄くまぶしい。これらを参考に書きました。右京はパツと思いついたキャラクターです。

司会 奥さんが出てきませんか。

松本 それが名探偵の条件です。私生活は謎なのです。

1課の刑事で、バカではありません。普通の人間で、右京と8年もつきあって変わらないのはおかしい。無理に継続するのはもつとおかしくなるので卒業させました。

司会 新しい及川は右京に近いキャラのようだ。

奥水 薫とは違うタイプにあえてしました。おいおいわかります。

会場からの質問

Q サスペンダーはロンドン仕込ですか?スコットランドヤードにはあのスタイルは多いのですか?ジャケットの下にやっけないことがあるようですが…

水谷 スコットランドヤードには結構います。ジャケットを脱がないときは実はサスペンダーはしていません。サスペンダーは実は肩がこるんです。風でジャケットが翻って内側が見えたり、ベルトが見えたり具合が悪いですね。肩がこるのはサスペンダーをちよつとゆるめればいんですから。よく細かいところを見ていただいて嬉しいです。

Q 亀山の人生が相棒のままではよくない、と了解できました。何かの機会に亀山はこうしていると知らせてください。

Q いつも秋から冬のファッションですが、春から夏のファッションも見せてください。

松本 どちらも難問ですが、検討します。

Q 紅茶は自宅でもあの淹れ方?

水谷 どこまで高いところからできるか挑戦する気持ちで、だんだん高くなりま

【あ】青木裕子 赤井朱美 秋田完 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 有馬哲夫 石井彰 【い】石井清司 石井ふく子 石橋冠
磯野恭子 磯村健二 市岡康子 一色伸夫 伊藤雅浩 井上良介 岩澤敏 【う】上田千秋 碓井広義 歌田勝彦 宇野昭 浦田彰
【え】江口展之 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】大蔵雄之助 太田敬雄 大西康司 大西文一郎 大原誠 大原れいこ
大山勝美 大類啓 大脇明 岡弘道 岡崎栄 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明 小河原正巳 沖野瞭 萩野慶人 小田久榮門
織田晃之祐 【か】加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫 加藤迪 金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀
加納孝夫 川平朝清 上安平冽子 鴨下信一 川口健一 川口幹夫 川竹和夫 河邑厚徳 河村正一 【き】岸田功 北川泰三
北川信 北出晃 北村美憲 北村充史 木村栄文 木村成忠 【く】楠美昌 工藤英博 隈部紀生 【こ】小池勝次郎 河野尚行
児玉孝光 児玉久男 後藤和晃 小南武朗 近藤晋 今野勉 【さ】斎藤伸久 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正
坂元元江 桜井均 桜井元雄 佐々木彰 佐々木欽三 佐藤秀山 佐藤利明 佐藤年 澤田隆治 沢田隆三 【し】重延浩 重村一
静永純一 嶋田親一 清水満 下重暁子 城菊子 【す】菅野高至 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木昭典 鈴木克明 鈴木典之 鈴木道明
須磨章 【せ】せんぼんよしこ 【そ】曾根英二 【た】高島秀之 高戸晨一 高橋一郎 高橋啓 滝大作 武本宏一 武谷雅博
田澤正稔 田中昭男 田中直人 田原英二 田原茂行 【ち】千葉勉 【つ】露木茂 鶴橋康夫 【と】土居原作郎 堂本暁子
戸田佳太 外崎宏司 富永卓二 豊田由紀子 土門正夫 【な】中崎清栄 中澤忠正 中島僚 中田美知子 永田浩三 長沼士朗
永野敏一 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村耕治 中村美美子 中山和記 難波秀哉 【に】新村もとを 西ヶ谷秀夫 西川章
丹羽美之 【の】野崎茂 信井文夫 【は】萩野靖乃 橋本潔 林健嗣 林裕史 原由美子 原田庸之助 【ひ】久野浩平
備前島文夫 【ふ】深町幸男 福田雅子 藤井潔 藤井チズ子 藤田晋也 藤久ミネ 【ほ】星田良子 堀川とんこう 【ま】前川英樹
松尾羊一 松平定知 松前洋一 松本明 松本修 松本国昭 【み】三上義智 水上毅 水野憲一 三村景一 三村千鶴 宮川鏡一
三宅恭次 明神正 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】守分寿男 諸橋毅一 【や】八木康夫 矢島良彰
藪内広之 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 大和定次 山根基世 【よ】横沢彪 横山英治 吉澤保
吉永春子 吉村直樹 吉村光夫 【わ】和田智允 渡辺紘史

☆新会員紹介☆ (順不同)

秋山豊寛
農業兼著述業(元TBS報道部)
織田晃之祐
武蔵美大映像学科講師(元NHK)
永野敏一
ヤマトプロテック 広報制作
(元TBSビジョン TBS事業局)
永田浩三
武蔵大学社会学部教授(元NHK)
武本宏一
フリープロデューサー(元TBS
テレビマンユニオン)
雨宮望
ドラマ演出(現日本テレビ制作局エ
グゼクティブディレクター)
豊田由紀子
アクターズカンパニー代表
加藤迪
(元科学産業部 Nスベ番組部)

編集後記

『杜撰(ずさん)な脚本』という見出しで「峠九十郎(三船敏郎)が寺の和尚にむかって「おい、そのボス、おめえだよ」とわめいた。いくらなんでも江戸時代で英語を使うか。いい加減な脚本にあきれた」云々(朝日新聞)と。◆数日後、担当プロデューサーの(S)氏宛の反論が載った。「あれはボスではありません。《坊主》と言ったのです。三船さんの台詞まわしが聞き取り憎いかもありませんが、脚本家の名譽のために筆をとりました」。そうなるはずさんな脚本というテーマ自体が崩壊する。ちなみに(S)氏の再反論はなかった◆また某批評家はある連ドラを評し「ドラマの主役〇〇はあきらかにミスキャスト」と断罪し、返す刀で「主役は当然XXだろう」とキヤスティングに嘴をいれた。当のドラマ演出家は(飲み屋で)「冗談言うな。XXのスケジュールが取れねえから〇〇にしたのだ」「ミスじゃなくアンラッキーな事態が起こるのが放送なのだ」◆そこで現場からは「重箱のシミしかつかないのが批評家、重箱の中身を見ないで分析するのが評論家」なる定説ができた◆『放送人グランプリ』の真意は役者のノリ、「組」(スタッフ)の意欲など、スタジオの雰囲気を知るところにある。現場を知る者たちの相互間批評いでよ、と言いたい。(M)

お詫び
前号の恒例「グランプリ下馬評座談会」は機知、ユーモア、辛辣な表現で業界に反響をよび、下段の編集後記でも放送人グランプリの真意に触れました。しかし文中事実誤認、勘違い発言があり、当事者、関係者からクレームがあり、ご迷惑をおかけしましたこととお詫び致します。個々の具体的箇所
の説明はスペース上省略しますが、編集部への問い合わせには応じますので、ご一報ください。(松尾)